

## 頼政と鶴の闇

高志の国文学館主任・学芸員 小林加代子

鶴王——昭和四十年代に大ヒットテレビドラマ「時間ですよ」や「寺内貫太郎一家」を世に送り出した、演出家久世光彦の父の俳号である。陸軍少将であったその人は、ホトトギス派の俳人でもあった。この一介の武人は、本土決戦に備えた任務に身を賭して当たり、終戦後復員して家族とともに暮らしたが、それからわずかばかりの歳月を過ごし、昭和二十三年、本当は、戦争とともに消えるはずの命であったかのように、突然の病で死んだ。

単なる偶然ではあるが、歌人であり武人であった源頼政に、鶴王と号した陸軍少将の姿が重なり合う。朝家の守りとして、朝廷に仇なす怪物を退治する武勇に秀でながら、あるとき転じて、朝敵として追討され命を落とした。頼政は、いつでも退治される鶴になりえるのである。人はそのきつかけも理由も知ることはできない。鶴と頼政は本質的に同じ闇を抱えている。得体の知れない不気味な闇は、時代を超えて、人と、人がつくりだす社会の中に蠢いている。

能「鶴」は、世阿弥作で『平家物語』巻四「鶴」を本説とする。能では他に「現在鶴」もあるが、後世、『平家物語』が記した頼政の鶴退治は、浄瑠璃、歌舞伎の題材となり浮世絵にも描かれて広く知られた。例えば歌舞伎は「女鶴艶頼政」、「頼政鶴物語」、「鶴退治」など枚挙に暇がないし、川柳も作

射られて落ちたところを刀で割かれて殺され、うつほ舟に入れて流された。

能「鶴」では、うつほ舟が大きな意味を持つ。うつほ舟は、丸木の内を刳りぬいた舟である。靈魂が宿る母体と考えられるもするようであるが、言うなれば彼岸と此岸の間に浮遊する存在と見ることもできよう。神仏がうつほ舟で漂着する話、『正八幡縁起』他、多くあるとされるが、能に関連している。世阿弥『風姿花伝』の秦河勝の記事が想起される。能の祖とされる秦河勝は、晩年、うつほ舟に乗って西海へ赴き、播磨国坂越に漂着した。漂着した河勝の姿は、人間とは違っていて、人に憑いて祟り奇瑞をなすので、神と崇め、大荒大明神と名づけたという。では、うつほ舟に乗せられて流された鶴はどうなったのか、詞章を見ていきたい。

旅の僧が、摂津国芦屋の里で一夜の宿を借りられず、洲崎の堂に仮寝していると、声が聞こえてくる。

浮沈む

涙の浪のうつほ舟

こがれて堪へぬ古へを

忍び果つべき隙ぞなき

川中に浮かんでいるかのような洲崎の堂は、それ自体が陸地を離れた非現実の世界を思わせる。そこに聞こえる声は、夜の闇の川波にゆられ、浮きつ沈みつしてあるかなきかに見える舟の、その舟中に、乗っているのかもはっきりわから

られ、『誹風柳多留』に「手のこんだ化物の出るししん殿」、「夜るへんに鳥だと笏で書いて見せ」などとある。壬生狂言の演目でも親しまれており、久世も宝塚歌劇で鶴退治の話を見たとき書いている。ついでながら、同志社大学の創立者新島襄の妻八重が、洋装和装を取り混ぜた身なりをはじめとした型破りな言動で「鶴」とあだ名されたことは、NHK大河ドラマ「八重の桜」でも取り上げられ記憶に新しい。さて、能「鶴」であるが、その詞章は、多様な諸本がある『平家物語』の中でも、語り本系諸本の一つである覚一本系の本文を忠実に用いることで知られる。『平家物語』と能「鶴」の最大の違いはその趣向で、『平家物語』が、鶴を退治する頼政の側に立った武勇譚であるのに対して、能「鶴」は、退治された鶴の側から言葉紡ぎ出す。

『平家物語』巻四「鶴」は、近衛院御在位の時、頼政が、夜な夜な帝を悩ませていた、頭が猿で胴体は狸、手足は虎で尾は蛇という得体の知れない「変化の物」を退治して、その賞に帝から獅子王という御剣を賜ったことを記している。

ちなみに、『平家物語』には、この記事の直後に、二条院御在位の時のこととして、頼政が鶴という化鳥を射落として勲賞に預かったという、似たような記事がもう一つある。退治された「変化の物」に話を戻すと、頼政が放った矢に

ない舟人——正体は鶴の亡霊——の声であった。声は言う。波に苛まれて、涙にくれつつ、焦がれてやまない昔への思いに、沈みつくす暇さえないのだと。

古き歌にも芦の屋の

灘の汐焼いとまなみ

つげの小櫛はさ、ず来にけり

我も憂には暇なみの

汐にさ、れて

舟人は

さ、で来にけり虚舟

さ、で来にけり虚舟

現か夢か明てこそ

みるめもからぬ芦の屋に

一夜寝て蟬人の

心の闇を弔ひ給へ

有難や旅人は

世を通れたる御身なり

我は名のみぞ捨小舟

法の力を頼むなり

法の力を頼むなり

『伊勢物語』第八七段に見える和歌「芦の屋の灘の塩焼き暇無み黄楊の小櫛もささず来にけり」が引かれる。灘の塩焼きが暇無くて黄楊櫛をさすこともできないというが、自分

は憂いの苦しみに暇無く、潮の寄せるままに、棹さすこともなく、ここへやって来たのだという。このことが現であったのか夢であったのかは、夜が明けたらわかるであろう。どうかこの自分の心の闇を弔ってほしい。ありがたいことだ。旅人は世を捨てた僧侶である。自分も同じ「捨て」の名はあるが、こちらは捨てられた小舟。仏の力を頼むばかりである。舟人は、そう言って頼政に退治された昔を語りはじめ。僧は帝を悩ましたその執念を、翻して成仏する力とするようにと言いが、前シテの舟人は、浮かぶべきよすがもないと言って、再び舟に乗り夜の波間に姿を消す。

うきぬ沈みぬ

みへつかくれ絶々の

いくへに聞は鶴の声

怖しや冷まじや

あらおそろしやすさまじや

うつほ舟が、浮いては沈み、見えては隠れて遠ざかってゆくと、波間に幾度となく鶴の恐ろしいもの凄声轟き、後シテの鶴が登場する。そして、再び退治された昔を語る。

頼政は名を揚て

我は名を流すうつほ船に

押入られて淀川の

よどみつ流れつ行末の

弥が將軍義教に疎んじられ悲運の境涯にあったという指摘を挙げている。

頼政と鶴、そして世阿弥。彼らは崇徳院の怨念に連なるという。前掲の『風姿花伝』に世阿弥が記した能の祖秦河勝は、鶴と同じうつほ舟に乗っていたのであるが、河勝は漂着して祟りをなし、神と崇められることになった。すなわち此岸の論理に回収されるのである。一方、同じ世阿弥の作ではあるが、鶴は、芦屋の川波の中で浮洲に留まり朽ちていた。亡霊となつて僧に昔を語つても再びうつほ舟にゆられて海へと帰つてゆく。

能「鶴」において、うつほ舟は、沈むことも浮かぶこともなく、何もできずただ身を任せて波にゆられ、その波ゆえに苛まれて、昔を焦がれて思い沈みきることもできない鶴の、あの世でもこの世でもない場所、永遠に中途半端に置かれ続ける苦しみをあらわしている。

鶴は、敗者だったのだろうか。『平家物語』は「諸行無常」「盛者必衰」という。すべてが移りゆく。鶴を退治した頼政は平家に追討され、平家は義経に滅ぼされ、義経は頼朝に殺された。頼朝にはじまる源氏將軍もまた三代で絶える。絶えることのない流転が語られる。しかし、こう見ることもできない。放逐されるものは、常にそこにある。もつと言え、人は何かを放逐し続ける。だからこそ、うつほ舟は闇に沈みきることはない。

山下が指摘した崇徳院の怨念に連なるこの変遷は、換言すれば権力の変遷とも言える。能「鶴」において、仏法の救済

宇渡野も同じ芦の屋の

浦半の浮洲に流れ留つて朽乍虚舟の

月日もみえず暗きより

暗き道にぞ入にける

遙に照せ山の端の

遙かに照せ

山の端の月と共に

海月も入にけり

海月と共に入にけり

『拾遺和歌集』の和歌「暗きより暗道にぞ入ぬべき遙に照せ山の葉の月」が引かれるが、この和歌は、闇を照らす月に喩えて仏法による救済を求めるもので、和泉式部がこの歌により成仏したという話が『古本説話集』、『無名草子』などにある。しかし、うつほ舟に乗った鶴はどうなるかといえば、詞章は、山の端に入る月とともに、海に映った月影も消え、鶴もまた海に帰つてゆくと記す。同じ状態に戻るだけなのである。

ところで、山下宏明「平家物の能を読む(四)——(鶴)後編——」(『観世』第七九卷第九号、二〇一二年九月)は、鶴が能の中で語る「こがれて堪へぬ古へ」、おさえきれぬ懐古の思いとは、崇徳院の不遇の思いであり、その思いは以仁王をかたらう頼政へ、そして鶴に引き継がれると述べる。さらに松岡心平の論を挙げて、晩年の世阿弥が自身に鶴を重ね、「王法に奉仕して怪異を鎮め排除する、両義性を具有する芸能者を以て自認していた」という。また、島津忠夫の、世阿

が有効であったようにには書かれないのは、仏法も王法もまた、武と本質を同じくする、権力だからではなかったか。しかし、何が支配関係を生み出す力となるかを容易に知ることはできない。鶴という語はまた、得体の知れないものを比喩的に指す語として通用しているのであった。

再び鶴の名を持つ陸軍少将に戻ろう。実は、鶴王という号は、樺太に派遣された彼が駐屯した寒村が、現地語でヌイウオと呼ばれていたことによるらしい。陸軍少将の俳号は、本当に単なる偶然というわけである。ついでに言えば、彼は俳人として名を馳せたわけでもない。いわば彼は、高位の軍人ではあるが、どこにでもいる普通の人なのである。しかし、鶴の名を持つ名もなき人は、昭和を代表する演出家久世光彦に、昭和という時代を考えさせるきっかけとなった(久世光彦『昭和幻燈館』所収「鶴のごとく」、同『花迷宮』所収「鶴伝説」等)。

鶴王は、すでに鬼籍に入ったが、終戦から死に至るまでの三年間は、彼にとつてどのようなものだったであろう。誠実に任務に当たり、教養豊かで剽軽で理解のある人だった父。久世光彦の作為は、一つの時代が終わり、新しい時代の中にぼつねんと取り残されたかのような父の姿を記している。鶴王は、うつほ舟の中になかったのだろうか。

放逐された者の声。能「鶴」は、『平家物語』に内在する問題を、いや、現代が抱える問題を、あぶり出す。闇に浮かび上がるそれは、闇の存在を知らしめ、そして、あるかなきかの声を発し続けている。完全に流し去ることはできない。